

1. タイトル 「いきいきとしたシニア社会へ」 — 喜び・楽しさ・共感・連帯・誇り —

2. テーマ設定

社会教育委員会議は、これまで、社会教育に関する諸計画の立案という職務を遂行するために、社会教育が取り組むべきその時々課題を設定し、現場に足を運びながら調査・研究をすすめ、教育長を通じて教育委員会に提言してきた。そこで、今期は、シニアに期待される役割やシニアを対象とした施策等を丹念に掘り下げつつ、研究課題を「学校・家庭・地域の連携に向けて、シニアに期待される役割とは— 生き生きとした姿のシニアが見られる地域社会へ」と設定して取り組んできた。

そこで、さまざまなシニアがいることを前提に、シニア自身がどのような場において活動を望んでいるのかの視点と、他方、どのような場がシニアの活躍を求めているかという両視点から活躍ステージ候補を挙げ、各ステージの研究班を作り、実態調査を行いながら研究を進め、行政として取り組むべき施策や支援策についての提言を行なった。

3. 構成

「はじめに」、「シニアについての現状認識」(第1章)、「活躍ステージ」(第2章)、「提言」(第3章)、「おわりに」からなる構成。

4. 内容

第1章 シニアについての現状認識

1 「シニア」の定義及び人口の推移

本報告書においては、50歳以上をシニア世代と定義しているが、川崎市においても少子高齢化が急速に進み、2025年にはシニア世代(50歳以上)が過半数になると推計されている。中でも川崎市への定住希望者が7割以上いることや、市内在住外国人が全市人口の2.3%いることが川崎市の特徴である。

2 「シニア」が望むこと及び「シニア」に期待していること

50歳以上の多くの方々が、健康や老後の生活に高い関心を持っているのは当然としても、多岐にわたる領域の能動的な活動に関心を持っている市民も少なくない。

しかしながら、参加実態については、実際の活動に参加している人は少ない。地域コミュニティの基礎基盤組織である町内会・自治会への加入率を見ると、川崎市では67.1%となっているが、そのうち「実際の活動には参加していない」という方が多く、町内会・自治会活動に参加するためには、ある程度時間に融通が利かないと務まりにくい現状が見て取れる。

一方、シニア世代に期待する活動としては、「知識や技術の継承」「子育て支援・青少年の育成」「防犯パトロールや消防団など地域の安全に関わる活動」など身近な地域での活躍を期待する声が多い。

3 川崎市の現在の施策

川崎市では、新総合計画「川崎再生フロンティアプラン」の第2期実行計画において、「シニア世代が地域社会で能力を発揮するための支援」を施策課題として挙げ、「かわさきシニア応援サイト」というシニア世代の視点でおすすめイベント等を紹介するホームページや、シニア世代が地域で活躍するための手引きとなるようなパンフレット「川崎市いきいきシニアライフインフォメーション」を配布し、シニア世代に関連する情報を一本化や、情報を提供する側も受け取る側も活用しやすいように積極的な情報発信を行っている。また、関係部署及び財団等の関係機関で構成する「シニア活動推進会議」において全庁的な情報共有を図るとともに、「シニア施策に関する連絡会」の開催や庁内イントラネットでの「シニア関連イベント情報」の掲載など、シニア施策関係部署の連携強化を図っている。

しかしながら、「2007年問題」の実態としては、年金受給年の引き上げによって、これからは65歳からでないと「地域」に目が向かないのではないかという予測もあり、非常に多様なシニアの自発的な思いを大切にしたい取り組みがさらに必要とされている。

第2章 活躍ステージ

1 町会・自治会を地域のステージに

町会・自治会の加入率は70%あるが、無職・自由業が70%近く占め、役員にいたっては固定化や高齢化が進み、人材難に陥っている。町会・自治会活動の存在意義や楽しい場所であることを発信し、会社人間を務めていたシニアを中心に参加していただくことで町会・自治会の活性化を図るとともに、参加されたシニアが生活人として「地域社会人間」の感性を取り戻していくことができる。

2 地域に誇りを持って

住宅地として転居し、川崎市に定着したシニアが多く、第2の故郷として川崎を愛し、知りたいと考える人がいる。こうした要望を活かしていく仕組みづくりを通して川崎に対する郷土愛を高めるだけでなく、世代間の交流を図り、地域を母体としたコミュニティを構築していく。

3 学校を地域活動のステージに

これまでの学校を支援・応援する活動は、保護者を中心としたものであり、シニアが活躍する事例としてはPTA、OB会、町会・自治会、老人会など団体からの派遣が多く、個人で参加される方は少ない。社会全体が総がかりで子どもを育てる上では、個人のシニアを含めた協力が必要であり、シニアがより主役性・主体性を持てるような取り組みを行っていく。

4 外国人市民との交流

川崎市では外国人登録者の人数が年々増加しているが、教育や医療に関する情報や、国際交流、一般的な社会生活に関して相談先が分からないと感じている。シニア世代にとって外国人との交流を通し、これまで培ってきた知識や経験を生かすことができ、生きがいを感じることに繋がるものである。外国人・シニア双方にとっての情報得る機会を作っていく。

5 地域を越えて集い合う仕組み ～かわさき雑学大学（仮称）設立構想～

川崎には多くの「かわさき都民」がおり、従来から地域社会との結びつきが希薄な人が多く、地域社会に上手く「デビュー」出来ない人がいる。シニアが運営し、講師を務める「かわさき雑学大学」を創設し、シニアの持つ知識や経験、ノウハウを生かして、研究テーマや趣味など様々な分野の講義を実施し、学ぶ喜び、講義できる喜び、交流する喜びを感じる場としていく。

第3章 提言

第2章で述べた5つの領域の活動ステージに多くのシニアが登場するために、共通して必要な支援策を以下に提言する。

1 【 情報の相互作用 】

シニアが求めている情報に触れる機会を増やしていくためには、川崎市のWeb サイトでシニアに関する情報を簡便に検索できるシステムの構築することや、IT 情報を発信できないような町会・自治会情報などに対して各区の担当窓口が一括して作成支援を行う必要がある。また、社会教育施設や他の市民利用施設への情報の掲示はもとより、市民祭り・区民祭等の交流イベントでの告知・紹介、学校内外の掲示版への掲示など各機関が連携して行う取り組みも有効である。

2 【 場の発掘・提供 】

継続的に活動する上で利用する公共の市民利用施設はすでに一杯で、特に新たな利用者には利用の可能性が少ない状況であるため、発想を転換し、利用できる会場を発掘していくことが必要である。

さらに、シニア世代が活動目的のために利用する施設だけが、「場」ではない。なんとなくあつまり、交流することができる「居場所」が必要である。

3 【 コーディネーター人材の養成 】

シニア自身が自分の持つ経験知や知識の価値に目覚め、地域社会人間になる動機づけを持つための企画やその企画を考えるコーディネーターの養成プログラムの提供が望まれる。

さらに、シニアの参加を望むところと、参加したい人をマッチングさせるコーディネート機能を持つ人材を養成することも必要である。

4 【 調査・評価システム 】

行政支援の改善やモデル事業の波及方法について示唆を得るためには、シニア世代を対象に、個々のシニアの行動変化評価視点と、各事業の運営に関わる評価視点を調査することが望まれる

5 【 新たなシニア施策の価値ある発信 】

シニアは決して社会の端に追いやられる暗い弱いイメージではなく、世の中の先頭に立っている社会教育的人財としての位置づけをし、新たに従来の高齢者対策・福祉対策と異なるシニア施策が必要となってくる。そのためには、教育委員会（社会教育）から「シニアが社会教育的人材としての価値ある市民である」ことを市全体に強力に発信し、たとえばシニア施策推進室などの組織創設により、ダイナミックな市全体の総合調整機能を発揮することが望まれる。

おわりに

提言として示したシニア社会が実現されれば、もっと若い時から地域社会の一員として自立した市民が育つ良い循環が期待できる。そのためにも、最初はさまざまところで、自発的なシニアのいろいろな取り組みが点として発生することが大切である。「誰もがシニアになる」ことを再度かみしめ、できることから市民と行政との協働を目指したい。